

あさひ ふ じ せい や
第63代横綱 旭 富士正也

大切なことは、自分で目標を立てて、それに向かってやるというだけで、それ以外はハッキリ言って、何もこだわってないんですよ。

私の生まれ育った青森県西津軽郡木造町（現つがる市）というところは、相撲が盛んな土地柄ですね。

物心がついた時には、私も他の子供たちと同じように相撲を取っていました。中学、高校では相撲部に入って、五所川原商業高校時代は国体に出て、団体優勝をしたこともあったんです。

それで、近畿大学に進むことになったんですが、相撲部の体質にちょっとなじめない部分があったんですね。それで、2年生の時に休学という形を取って、田舎に戻ったんです。ブラブラしているわけにもいかないので、漁師として働き始めました。漁は子供の頃から手伝っていましたから、特に抵抗感などはありませんでした。

年末になると、それまで入れっぱなしだった網を上げます。すると、だいたい1カ月くらいは漁が休みになります。その日は漁が休みで、たまたま家でゴロゴロしていたら、突然電話がかかってきたんです。相撲界への勧誘の電話でした。

偶然、家にいた私は、その電話を取ってしまった。

「東京に遊びに行きがてら、相撲部屋を見に行かないか？」

そんな内容でした。

まあ、どちらにせよ漁は休みだし、東京に遊びに行くのも悪くないな。相撲部屋を見学して、東京に住んでいるおじさんのところに泊まりに行って……。こんなふうに、私は何も深く考えていなかったんです。

ところが、東京に出かける段階になって、なんか周りの様子が変わりますよ。東京行きの電車に乗る時になったら、姉貴が泣いているんです。

あれ？　なんで泣いているんだろう？

不思議でなりません。他の人たちも、「がんばれよ！」なんて口々に言うんですが、私としてみれば、「いやぁがんばるけど、見学が終わったら、すぐに青森に帰ってくるよ」。そんな感じでしかなかったんですね。

おじさんと一緒に、両国にある大島部屋に行きました。部屋に着いたら、親方（元大関・旭国）が2階のほうから降りてきて、「ハンコ、ある？」って突然聞くわけですよ。おじさんが私に、「ホラ、ハンコ出せ」と言うので、私がかばんからハンコを出しておじさんに渡したら、おじさんがポンと書類にハンコを押していたんです。

私は呆気を取られて、「今の何なんだ？」とおじさんに聞いたら、「もうおまえは大島部屋に入門したから」というわけです。

「それじゃあ、話が全然見えないよ」と私が言っているうちに、大島部屋のおかみさんが出てきて、おかみさんがいろいろと私に説明をしている間に、おじさんはサーッといなくなっていた。逃げるようにね。

私は半分騙されながら、相撲部屋に来てしまったわけです。騙して部屋に置いていけば、そのうち何とかなるんじゃないかって、おじさんは思っていたんですね。

本当に困りました。おかみさんはおかみさんで、すごくいいいに相撲部屋のことを説明するし、ハシコを押したことで入門したことになるっていわれるし、「まあ、とりあえずここにいてみよかな」という感覚でした。

あと、おかみさんの説明の中に、「力士を一旦辞めてしまうと、入門し直すということとはできない」というのがありました。大学だったら、休学しても復学というのはありえますが、相撲界にはそれはないということですね、つまり。

それで、ちょっと自分なりに考えてみたわけです。稽古を2回くらい見学して、あくまでこれは見学です。でも、今度は土俵に降りて3日、4日と相撲を取っているうちに、なんかこうグッと気合いが入ってきてしまったんです。

もともと相撲を取っていたし、それがしばらく休む期間があって、また相撲を取って見たら、案外相撲も悪くないな……って思えてきたんですね。ブランクは正味10カ月くらいあったのでしょうか？

年が明けた昭和56年初場所で初土俵を踏みました。その時、私は20歳になっていました。大島部屋はその前の年にできたばかりの、いわゆる新興部屋でしたので、当然力士の年齢も若い。私が一番年上だったので、そういう意味では、居やすい雰囲気はありましたね。

大島部屋の稽古は、それは厳しかったですよ。

朝は5時から始まって、10時半くらいまで稽古。昼めしと昼寝、掃除をはさんで、今度は夕方4時から7時くらいまでやるんです。それで、寝る前には1時間筋トレをやるという具合ですから、言ってみれば一日中相撲漬けですね。

私は何気なく入門してしまったんですが、入ったからには目標を立てなければと思いました。

1年で十両に上がる。

じゃあ、上がるためには具体的にどうしたらいいのか？ それをしっかり考えて、実行して行こう。

具体的には、稽古しかないと考えました。自分が好む、好まないに関わらず、当時の大島部屋の稽古形態がそういう感じだったので、とにかく稽古をするという環境はあるわけで、体は鍛えられるし、いい環境だなあと思いましたね。

56年春場所、序ノ口で優勝。名古屋場所で三段目優勝。そして、九州場所で幕下優勝。大学の相撲部に在籍していたとは言え、10カ月のブランクがあるわけですから、端で見ているより厳しい部分もありました。一場所一場所、ブランクを埋めていくというか、力を確かめるように相撲を取っていました。

私が立てた目標のとおり、57年の春場所で新十両に昇進です。一応、当初の目標を達成できたわけなので、気持ち的に楽になったことは事実です。ちょっと得意な気分でしたね。

でも、それから新入幕まで、1年もかかっちゃった。58年春場所で入幕したのですが、幕内力士として、とても楽しみにしていることがありました。

少年時代に相撲を見ていて、私が強くて憧れていた横綱は、北の湖関と輪島関でした。両横綱の千秋楽での対戦をワクワクして見ていたものです。当時、輪島関はすでに引退していましたが、北の湖関は現役の横綱。力士となったからには、北の湖関と対戦してみたいという気持ちが強かったのです。

ついに、その時がやってきました。58年の九州場所、私が新小結になったその場所の2日目に、北の湖関との取組が組まれたのです。

自分の力がいったいどこまで通じるのか――。

対戦する前は、そりゃあうれしくて、楽しくて、とにかく思い切りやってやろう！ という気持ちだったので、緊張もあまりしなかったです。初顔、結果的にはもちろん負けてしまいましたが、また一つ目標を達成したような気がしましたね。

幕内に上がって、三役にも昇進した。そこで、今度は、「5年で大関に上がる」という目標を立てたんです。たまたま幕内に上がって、5場所目で三役に上がったかもしれない。だけど、いきなり「5年で大関」なんて私が言うもんだから、みんなに笑われましたよ。他の関取衆に。それは笑うわな。なんの実績もないのに、目標だけはすごいんだから。

私は入門した時点で、ハタチでしょう。15歳で入った力士より、長く相撲は取れないわけです。それは、ある程度意識していました。だから、目標が大切だと思ったんです。「5年で大関」、そう勝手に思ってでもいなければ、相撲なんて取れないですよ。

北の湖関とは全部で6回の対戦がありました。横綱は引退する間際だったということもありましたが、3回勝たせていただいたのはいい思い出です。両国に新しい国技館ができた昭和60年初場所、その初日にも対戦しているんです。その場所限りで、北の湖関は引退してしまうんですが……。

大関への道のりというものは、なかなか苦しいものでした。当時、絶対的な存在として横綱千代の富士関がいて、私はどうも勝つことができない。サンパチ組の北尾（双羽黒）や保志（北勝海）、それに大乃国、小錦と大型力士も台頭してきて、相撲界は戦国時代になっていました。

私は27歳になろうとしていました。目標の5年まではあと1年。

昭和62年夏場所から、10勝、11勝と続けて、秋場所では大関獲りにリーチがかかっていた。秋場所では私は12勝。大関を手中にしたのです。

62年九州場所、大関に昇進した私は、翌63年初場所で幕内優勝を果たしました。千秋楽に千代の富士関に勝って優勝できたということが、本当にうれしかったですね。それまで、ずっと苦しめられてきましたから…。

大関に上がって2場所目で優勝。そうしたら、まわりが勝手に、「次は横綱だ」って騒ぎ出したんです。ようやく「5年で大関」という大目標を達成したのに、次は横綱か……。もしかして、横綱を目指さなきゃいけないのかなって感じになってきたんです。だんだんとなんですが。

それから1年半くらいは、コンスタントに12勝、11勝、13勝とか一定の成績を残していたんです。でも、平成元年の名古屋場所、連続二ケタ勝利が14でストップしたあたりから、持病のすい臓炎が悪化してきて、ガムシャラに相撲を取るというわけにいかなくなってしまったんですね。自分のペースを守って、稽古するしかなかったんです。

すい臓炎というのは、体に力が入らないんです。力を入れようと思っても、食べ物が食べられないから、体力がないし。野菜とどんぶり飯だけで、1場所乗り切ったこともありましたが、やっぱり成績はダメでしたね。治療の薬はないんです。自分自身で節制していくしかないという状況でした。まあ、以前はお酒もなんでもいけるクチで、けっこう飲んでいたんですけど、もちろんアルコールはいっさいやりませんでした。

調子が少し上向いてきたのは、平成2年の夏場所です。2回目の幕内優勝で、周囲が横綱昇進ムードになってきました。30歳になる直前です。

チャンスというのは、そう何度もやってくるものじゃありません。とにかく、ここで横綱を決めるんだと、私は固く心に決めました。

そして、千秋楽。またしても、千代の富士関との対戦がやってきました。長い相撲になってね。お互いにけっこう力が入って、投げの打ち合いから、最後は私のすくい投げが決まったんですが、すごく疲れましてね。相撲が終わった後に、20~30分間吐き気がしていましたよ。もう疲れすぎちゃって。

30歳で横綱という大きな目標を達成することにしました。

昇進した時は、目標が達成できてうれしい。そして、なんかグッとくるような、うれしさというんなものがこみ上げてくるような不思議な感覚。大関に昇進した時とは違う感覚でしたね。横綱に昇進したという時点で、もうプレッシャーが来るじゃない？ 負けられないという気持ちも余計に強くなってきてね。

横綱に推挙された時の口上で、私は「健康に留意して相撲を取ります」と言ったんですよ、たしか。

じつは大関の時代、例のすい臓炎で何べんか入院しているんですよ。そういうことがあったので、余計燃えたというか、横綱になってやる。このままじゃ終わらないぞ！ という気持ちが強くなっていったんだと思います。だから、口上はそういう思いが自然と口についてしまったんでしょうね。

横綱になってからは、けっこうつらかったですよ。平成3年夏場所で、千代の富士関は引退しましたが、今度は曙や若貴兄弟、安芸ノ島や貴闘力の（旧）藤島勢といった元気いっぱいの若手力士たちが、どんどん出てきてね。

そんな中、女房はよくサポートしてくれました。食事の面もそうでしたし、力が弱いのにマッサージをさせたりね。娘が生まれているいろいろ大変だったのに、本当にありがたかったと思います。

まあ、横綱というのは、常に優勝争いをなければならぬし、優勝をして当たり前という世界ですよ。私もそういう気持ちでいたことは確かです。

でも、今だから言えることなんですが、目標としていた横綱になった。横綱になってしまった時、その先の目標を見つけられなかったんです。だから、とりあえず横綱という地位で早く優勝をしようということだったのです。

平成3年の夏場所でなんとか、横綱で初めての優勝をすることができました。その優勝の後、また目標を見つけられなくなってしまった。

横綱になって、34、35歳まで相撲を取る人もたくさんいます。でも、私の場合はすい臓が悪いでしょう。それを何とか調整しながら、稽古してトレーニングして、食事も摂ってきた。それが何年も続いてきているので、目標がなかったら、そういうことをすることさえも重荷になってしまうんですね。

最後の場所になった平成4年初場所は、初日を迎えた時に、今場所で引退しようなんていうことを思っていたわけじゃなかったんです。

場所前に、またすい臓を痛めてしまったことで、それを前のように戻すには、また一生懸命努力しなくちゃいけないわけです。でも、先の目標が見えないから、それもかなり厳しい。それと、場所中に娘がちょうど熱を出して、3日間くらい寝ないで相撲を取ったこともきつかったです。

たまたまそういうことが全部重なってしまったんですね。だから、周囲もマスコミの人たちも、まさかこれで引退してしまうとは思っていなかったみたいです。

でも私は、自分で掲げた目標をとりあえず一つ一つ達成してきた。そして、全部達成することができた。そういう意味では土俵人生に、まったく悔いというものはありません。

私はいつもそんな感じなんです。お相撲さんをはじめ、勝負師の人ってゲンを担いだりする人が多いようですが、ゲン担ぎはいいしませんでした。大切なことは、自分で目標を立てて、それに向かってやるというだけで、それ以外はハッキリ言って、何もこだわってないんですね。

だから、「旭富士」という四股名も、たしかおかみさんのお母さんが命名したはずですよ。「旭富士って、いい四股名でしょう？」なんて言われても、私の腹の中じゃ、「何でもいいじゃない、四股名なんて」ってそんな感じ。

横綱土俵入りは、私の場合一門の横綱が不知火型の方が多かったので、私も不知火型になったのですが、「短命横綱が多いから、縁起が悪い」とか言われて。その時も「不知火型でも雲竜型でもどっちだっていいんじゃない？」とっていましたよ。とにかく、こだわらないタイプ。

現役を引退して、部屋を持って17年になります。部屋も新しく立て替えて、2年が経ち、大関日馬富士、幕内安美錦らががんばってくれて、相撲部屋らしくなってきたんじゃないかなと思っています。

日馬富士は安馬時代から、よく稽古をされると言われることが多かったんですが、師匠の私から見れば、まだ物足りないですね。あのぐらいで「よくやっている」なんて言われるのであれば、周りがよっぽどやっていないんじゃないかと思うくらいです。

私たちの時代は、場所中でも30番、40番と稽古していました。今は、場所中となると、10番とか15番。ほとんどやらないなんていう力士もいるようですね。

だから、どんな時でも、「自分で50番やる」とか目標を決めて、それをやり遂げるべきだと思うんです。今の白鵬が大関の頃だって、けっして番数が多いとはいえなかったんですよ。でも、それ以上に周りが稽古しないものだから、全体的にレベルが落ちてしまっているんじゃないかと思うんです。

悲しいけれど、最近は相撲を見ていて、あまり感動しないというのかな？ 見ている人を魅きつける何かが、少し欠けているように思うんです。

今、関取衆は学生相撲出身の力士が1 / 3くらいいると思うんですが、もしかしたら、大学生やアマチュアの人たちのほうが、稽古しているかもしれませんね。稽古してきた大学生が大相撲界に入門して

きて、5、6人入ったとしたら、3、4人くらい関取になっていますからね。私らの頃は、そんなに簡単に関取になっていません。

この現象どう考えればいいのでしょうかね。学生のレベルが特に上がってきているとも感じないから、レベルが全体的に下がってしまっているんだと思います。レベルが落ちている分だけ、迫力とか技術の面でみなさんに感動を与えられないのでしょうか。

何度も言うようですが、成功するためには、目標を設定することです。目標を具体的に紙に書くとい
いみたいですよ。

たとえば、四股を500回踏んでも成績に結びつかないようなら、次は1000回と、紙に書く。私
が大関に上がる前も、「大関旭富士」なんて、毎日紙に書いていました。大関になるためにどうしたら
いいかという手順を全部書いて、それを全部やっていたしね。

相撲に限ったことじゃなく、きっといい結果が出るんじゃないかと私は思っています。